

卷 四

太田和泉守これを綴る

元龜二辛未

佐和山城渡し進上の事

正月朔日、濃州岐阜にて各御出仕これあり。

二月廿四日、磯野丹波降参申し、佐和山の城渡し、進上して、高島へ罷り退く。則ち、丹羽五郎左衛門を城代として入れおかれ候ひき。

箕蒲合戦の事

五月六日、浅井備前、あね川まで罷り出で、横山へ差し向け、人数を備へ居陣候て、先手足輕大将浅井七郎、五千ばかりにて、みのうら表、堀・樋口居城近辺に相働き、在々所々放火候。木下藤吉郎、横山に人数多太貼と申しつげおき、百騎ばかり召し列れ、敵かたへ見えざる様に、山つらを廻り、みのうらへ懸げつけ、堀・樋口と一手となり、纔五、六百には過ぐべからず。五千ばかりの一揆に足輕をつけられ、下長沢にて取合ひ、一戦に及ぶ。樋口が内の者・多野尾相模守討死候。此の由、家来の土川平左門承り候て、懸け込み、討死仕り候。比類なき働き

なり。一揆にて侯間、終に追ひ崩し、数十人討ち捕る。又、下坂のさいかちと云ふ所にて、たまり合ひ、爰にても暫く相戦ひ、八幡下坂まで癈軍致し、浅井備前、曲無く人数打ち入り候なり。

大田口合戦の事

五月十二日、河内長島表へ三口より御手遣り。信長は津島まで御参陣。中筋口働きの衆、佐久間右衛門、浅井新八、山里三左衛門、長谷川丹波、和田新介、中島豊後。川西多芸山の根へつけて、太田口へ働きの衆、柴田修理亮、市橋九郎左衛門、氏家卜全、伊賀平左衛門、稲葉伊予、塚本小大膳、不破河内、丸毛兵庫、飯沼勘平。

五月十六日、在々所々放火候て、罷り退き候のところに、長島の一揆ども山々へ移る。右手は大河なり、左は山の下道、一騎打ち節所の道なり。弓鉄炮を先々へまはし、相支へ候。柴田修理見合せ、殿侯のところ、一揆ども焜と差し懸け、散々相戦ひ、柴田薄手を被り、罷り退く。一番、氏家卜全取り合ひ、一戦に及び、卜全、其の外、家臣数輩討死候ひしなり。

八月十八日、信長公、江北表へ御馬を出だされ、横山に至りて御着陣。

八月廿日の夜、大風生便敷吹き出で、よこ山の城塀・矢蔵吹き落とし候へつる。

八月廿六日、大谷と山本山の間、五十町にはこれを過ぐべからず、其の間の郷、

中島と云ふ所に、一夜御陣を居えさせられ、足輕仰せつけられ、与語・木本まで悉く御放火なり。

廿七日、よこ山へ御人数打ち歸させられ、

志むら攻め干さるゝの事

八月廿八日、信長公、佐和山へ御出で、丹羽五郎左衛門所に御泊。先陣は一揆楯籠り候小川村・志村の郷推し詰め、近辺焼き払ふ。

九月朔日、信長公、志むらの城攻めさせ御覧じ、取り寄する人数、作久間右衛門、中川八郎右衛門、柴田修理、丹羽五郎左衛門、四人仰せつけられ、四方より取り寄せ、乗り破り、頸数六百七十討捕る。これによつて、並郷、小川の城主小川孫一郎、人質進上侯て、降参申すの間、御赦免なさる。

九月三日、常楽寺へ御出であり、御滞留ありて、一揆楯籠る金ヶ森取り詰め、四方の作毛悉く苅田に仰せつけらる。しゝがき結びまはし、諸口相支へ、取籠めをかせられ候ところ、御詫言申し、人質進上の間、宥免なされ、直ちに南方表へ御働きと仰せ触れらる。

叡山御退治の事

九月十一日、信長公、山岡玉林所に御陣を懸けらる。

九月十二日、叡山へ御取り懸く。子細は、去年、野田・福島御取り詰め侯て、既に落城に及ぶの刻、越前の朝倉・浅井備前、坂本口へ相働き侯。京都へ乱入侯ては、其の曲あるべからざるの由侯て、野田・福島御引払ひなされ、則ち逢坂を越え、越前衆に懸け向ふ。つば笠山へ追ひ上げ、干殺なさるべき御存分、山門の衆徒召し出だされ、今度、信長公へ対して御忠節仕るに付きては、御分国申にこれある山門領、元の如く還附せらるべきの旨御金打なされ、其の上、御朱印をなし遣はされ、併せて、出家の道理にて、一途の最員なりがたきに於いては、見除仕り侯へと、事を分ちて仰せ聞かさる。若し、此の両条違背に付きては、根本中堂、三王廿一杜を初めとして、悉く焼き払はるべき趣、御錠侯へき。時刻到来の砌歟。山門・山下の僧衆、王城の鎮守なりと雖も、行躰行法、出家の作法にも拘らず、天下の嘲哂をも恥ず、天道の恐をも顧みず、姪乱、魚鳥を服用せしめ、金銀賄に耽りて、浅井・朝倉に鼻負せしめ、恣に相働くの条、世に随ひ、時習に随ひ、まず、御遠慮を加へられ、御無事に属せられ、御無念ながら、御馬を納められ侯へき。御憤を散ぜらるべき為めに侯。

九月十二日、叡山を取り詰め、根本中堂、三王廿一杜を初め奉り、靈仏・靈杜・僧坊・経巻一字も残さず、一時に雲霞の如く焼き払ひ、灰燼の地となすこそ哀れたれ。山下の男女老若、右往左往に廢忘致し、取る物も取り敢へず、悉く、かちはだしにて、八王寺山へ逃げ上り、杜内へ逃げ籠る。諸卒四方より鬨音を上げて

攻め上る。僧俗・児童・智者・上人、一々に頸をきり、信長の御目に懸くる。是れは山頭に於いて、其の隠れなき高僧・貴僧・有智の僧と申し、其の外、美女・小童、其の員をも知らず召し捕へ召し列らぬ。御前へ参り、悪僧の儀は是非に及ばず、是れは御扶けなされ候へと、声々に申し上げ候と雖も、中々御許容なく、一々に頸を打ち落され、目も当てられぬ有様なり。数千の屍算を乱し、哀れなる仕合せなり。年来の御胸臆を散ぜられ訖んぬ。さて、志賀郡、明智十兵衛に下され、坂本に在地候ひしなり。

九月廿日、信長公濃州岐阜に至りて御帰陣。

御修理造りおはるの事

九月廿一日、河尻与兵衛・丹羽五郎左衛門、兩人に仰せ付けられ、高宮右京亮、一類歴々、佐和山へ召し寄せ、生害なり。切つて出で、相働き候へども、別条なく成敗なり。子細は、先年、野田・福鳥御陣の時、大坂へ心を合せ、一揆蜂起の調略を致し、御陣半に、御取出天満が森河口足かがりより、大坂へ走り入り候なり。

禁中に仰せて、既に御廢壞正体なきに付、御修理の儀、御冥加の為をおぼし食、先年、日乗上人・村井民部丞を御奉行として、仰せ付けられ、三ヶ年に出来。紫宸殿、清涼殿、内侍所、昭陽舎、其の外、御局々、残る所なく造らしめ畢んぬ。其

の上、御調物、末代に於いて懈怠なき様に御沙汰あるべく、信長公御案を廻らせられ、京中町人に属詫預けおかれ、其の利足毎月進上候様に仰せ付けられ候。并に、怠転の公家方御相続、是れ又、重畳御建立。天下万民一同の満足これに過ぐべからず貼。本朝に於いて御名誉、御門家の御威風、あげてかぞふべからず。また、御分國中諸関諸役御免許、天下安泰、往還旅人御憐愍、御慈悲甚深く御冥加も御果報も世に超え、弥増御長久の基なり。併し、道を学び身を立つるも、御名を後代に挙げんと欲するがゆえなり。珍重々々。